

〔I〕 次の文章を読んで、問いに答えなさい。なお、字数指定のある問いでは、句読点・記号も字数に数える。

一九七八年にノーベル経済学賞を受賞した、ハーバート・サイモン（一九一六―二〇〇一）という人工知能・認知科学の A パイオニアがいます。かれは「注意力の経済 (attention economy)」という重要な概念を提起して次のように書いています。

「情報が溢れた世界において、情報の豊富さは何か別なものの欠乏を意味する。情報は受け手の注意力を B 消費する。受け手の注意力に働きかけることにより、情報は価値を持つ。情報のサプライヤーにとって、受け手の注意力は奪い合うべき資源である。彼らは競って、その受け手の注意力に向けて情報を発信する」。

情報が C 氾濫すれば、情報の価値を生み出している何かが稀少になる。その稀少資源とは、情報の受け手の注意力、意識、時間であると言うわけです。

しばしば「意識は時間の関数だ」と言われます。 D 時間に比例して意識が成立するという意味です。いくら寝ずに頑張ったところで、人間は一日二四時間しか持つことができない。メディアはその時間にたいして働きかける。そうすると当然、注意力の奪い合いになるわけです。

少しでも視聴率を上げるために、テレビは我々に向かって注意力を喚起する。注意力が意識の入り口だからです。しかし、ハイパー・テキストを 注三 プロトコルとする、デジタル・メディアのコミュニケーションが大きく発達したことにより、人間の注意力をめぐる競争が爆発的に（ 1 ）しているわけです。ネットのおかげで、我々のメディア生活はどんどんマルチタスクになっている。パソコンの画面はハイパーリンクされていますので、いろんなところにリンクが貼られている。それらのリンクは「今読んでいるページから、私のページに来てください」としきりに私たちに呼びかけている。

テレビならチャンネルを変えるといふ選択肢だけですが、ネットの出現により、パソコンで文書をつくりながら、メールに答え、ヤフーでニュースを知り、そこからリンクされている YouTube を見て、アマゾンに E 書籍の注文を入れるというように、いちどに複数の異なる作業をマルチタスクで行うということが一般化すると、人びとの注意力はさらに分散・ F ダンペン化されていきます。 G ますます激しく奪い合われる稀少資源となるわけです。至るところで、ネットに接続している私たちを取り囲んで注意を惹くための競争が行われるようになります。

例えば、イトラッカーというのは視線の動きを記録し H プンセキするための装置ですが、イトラッカーのような装置を使って視線の動きのブンセキによってウェブサイト上の広告料を決定する。実際にヤフー、グーグルなどの検索ポータルでも、画面の部分によって広告料が異なる。たとえば、画面の左上の部分は、みんながよく見るところなので、広告料が高いとか、

右下の部分にはあまり目が行かないから、広告料が安い。人間の注意力には法則性がありますから、それに基づいて広告料も変わります。

注意力を喚起するテクノロジーは、私たちの日常的な情報生活の至るところに配備されています。広告というのはたいがい「私のことを見てください」と、人びとの注意を惹きつけることがそのままメッセージになっています。起きて何かに注意を払っている時間をめぐっての競争そのものが、産業の原理になっていくわけです。

じっさい私たちはパソコンやスマホに向かっている時、画面をよぎっていくさまざまな情報に注意を払っている。そういうマルチタスク的注意に慣れるにつれて、ひとつのことに集中してじっくり取り組み集中する注意をつくる精神の働きが「担保されにくくなる」。(2)子どもたちにとって、これは非常に深刻なリスクになる。「ハイパー・アテンション(過剰注意)」という「注意力不全」状態に「陥るからです」。

実際に私たちのパソコンやスマホには、仕事をしていてもメールがどんどん割り込んでくるし、いろいろなニュースがポップアップで出てくる。そのようにして、(3)。

意識や意味は私の理論では記号からつくられると理解するのですが、その記号は脳の神経活動をベースにしている。脳がさまざまな刺激の信号を受け取ることにより、記号が働き意識が生み出されていく。たとえば動画を見ると「動画を見ている」という意識が生まれる。目をつぶってしまえば話は別ですが、一瞬でも動画を見れば「運動を見ている」意識が生まれてしまう。あるいは音楽を聴くと「音楽を聴いている」意識が生まれてしまう。(4)。この「見えてしまう」「聴こえてしまう」ということこそが、二〇世紀以降のメディアの問題なのです。

フッサールによれば、ここでは意識の「受動的総合」が起こっている。レコードや映画のように、それ自体が時間性を「オびている対象(映像・音楽)」のことを彼は「時間対象」と呼びます。その時間対象を見たり聴いたりすることによって、時間対象の流れとシンクロして意識が受動的に生み出される——「総合」される——わけです。「能動的総合」(「私が意識する」という「私」の意識が成立して意識をコントロールしている状態)の前段階として、この受動的総合という段階がある。メディアは「そういつた意識の成立メカニズムに基づいて人びとに働きかける。そこでは見る意識・聴く意識が、私という人称をもった意識が「介在するより以前に生み出されていきます」。

時間対象をメディアとする社会のなかで、私たちの意識は、刻々と大量に生み出されている。

(石田英敬『大人のためのメディア論講義』より)

注一 ハイパー・テキスト テキスト(文書)どうしを結びつける仕組み。ここでは主にウェブ上の技術を指す。

注二 プロトコル 取り決め、規定。

問一 傍線 F・H・K のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線 C・E・J の読みをひらがなで書きなさい。

問三 傍線 A「バイオニア」と同じ意味の言葉は次のうちどれか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 権威 イ 異端 ウ 技術者 エ 功労者 オ 先駆者

問四 傍線 B「消費する」と明らかに異なる意味の言葉は次のうちどれか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 消耗する イ 買いとる ウ 費やす エ 使う オ 食いつぶす

問五 傍線 Dの「時間に比例して意識が成立する」とはどういうことか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 人間は何かを意識するためには多くの時間を必要とするということ。

イ 人間は意識のあるあいだだけ時間を感じられるということ。

ウ 人間はもてる時間のぶんだけ何かを意識するということ。

エ 人間は何かを意識して時間を忘れることがあるということ。

オ 人間は時間と意識とを同じ価値で扱っているということ。

問六 空欄（ 1 ）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 異化 イ 悪化 ウ 激化 エ 劣化 オ 進化

問七 傍線 Gの「ますます激しく奪い合われる稀少資源」とは具体的に何か、文章中から十六字の語句を探し、記入しなさい。

問八 傍線 I「担保」と同じ意味の言葉は次のうちどれか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 保証 イ 委任 ウ 強調 エ 使用 オ 供給

問九 空欄（ 2 ）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア くしくも イ とりわけ ウ いよいよ エ かねて オ むしろ

問十 空欄（ 3 ）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア 私たちは仕事ができなくなってしまう
- イ 誰にも見られない情報が流れては消えていく
- ウ 時間のあるかぎり情報を探す必要が出てくる
- エ 人びとの時間にどんどん情報が割り込んでくる
- オ 情報に振り回されるばかりで損をする

問十一 空欄（ 4 ）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア これが昔から言われていることです
- イ これは意識しなければ問題にならない
- ウ これを抑えなくてはいけない
- エ これは現代的な疑問です
- オ これを防ぐ手立てはない

問十二 傍線Lの「そういった意識の成立メカニズム」とは何を指しているか、「～こと。」に続くかたちで文章中から二十七字の語句を探し、はじめと終わりの五字を記入しなさい。

問十三 傍線M「介在する」と同じ意味の言葉は次のうちどれか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア 成り立つ
- イ 忘れる
- ウ 変化する
- エ 生まれる
- オ なかだちする

〔Ⅱ〕 次の文章を読んで、問いに答えなさい。

日常的な生活のなかで、僕たちが自分というものを、もっとも強く意識させられるのは、やはり鏡を見たときであろう。僕の経験からすると、中学生・高校生あたりが鏡を^Aヒカク的よく見るような気がする。何といっても思春期であるから（カビが生えそうなくらい古くさいことばであるが）。

僕にも、一応思春期というものがあつたので、毎朝鏡の前で髪を整えるくらいのはやつた。やっぱりクラスのかわいい女の子が気になっていたんだろう。でも、当時は自分の顔はなんて醜いんだろうって、もうそればかりだった。それに、鏡を見るたびに自分の顔が違って見えるのだから不思議である。（1）、僕の思い出話ばかりしていても仕方ない。鏡について少し思いをめぐらしてみよう。

鏡とは何だろうか。現在、僕たちが日常で見る鏡は普通ガラスでできている。ところが鏡の歴史は意外と古い。古墳なんかには^Bイタイと一緒に銅製の鏡が入れられていたりする。もの本によると、なんと四千年も前から金属製の鏡はあつたそうである。（2）、ある辞典によると鏡は「姿や物の形を映し見る道具」となっている。まあ、光学的な難しい話はまたの機会にして、ここではとくに「自分の姿を映すもの」として^C焦点をあててみる。

ナルシスの話をご存じであろうか。ナルシスはギリシャ神話に出てくる悲劇の主人公である。ナルシストとかナルシズムということばを聞いたことがあると思う。ナルシスは、非常な美少年であつたが水面に映つた自分の姿を自分だとわからず、その姿に恋いこがれてしまう。しかし、その恋が^D成就するわけがない。そしてとうとう最後には死んでしまい、水仙の花になるのである。

ナルシスが悲劇の主人公なら、イソップ物語に出てくる犬は（3）喜劇の主人公かもしれない。この犬はあるとき、大きな骨をくわえてご機嫌で歩いてきた。ちょうど橋を渡ろうとしたときのことである。ふと下を見ると、そこには一匹の犬がいた。ところがその犬も大きな骨をくわえていたのである。この犬は欲張りだったのか、その犬が持っている骨も欲しくなつた。そして、「その骨を俺様によこせ！」とばかりに、水面に映つた自分の姿に吠^Eえついてしまったのである。^E結果はもうおわかりだと思う。いずれの話も、水面に映つた自分の姿を自分だとは認められずに起こつた悲劇（喜劇？）である。

鏡に関する昔話はほかにもたくさんあるようである。それにしても、初めて鏡を見たヒトは、そこに何を思ったのであろうか。

われわれ大人は鏡を見て、そこに映っているヒトの姿が、どんなに認めたくなくても（もちろん、僕は認めたくはなかったが）、自分自身だということがわかる。赤ちゃんはどうだろうか。

自己鏡映像の認知は発達とどのようにかかわっているのだろうか。

古くはワロン (H. Wallon) が、そして後にはアムステルダム (B. Amsterdam) が赤ちゃんの鏡に対する反応を調べて段階的に記述している。それらを統合してみると、もちろん個人差はあるが、だいたい次のようになる。

まず最初は、鏡に映った自分の像を「他者」だと見る時期である。生後六か月から一か月にもっともよく見られる反応で、鏡の像に対して、笑いかけたり、手で触れたり、声をかけたりする。そして^Fシダイに、鏡の像を注意深く観察したり、鏡の後ろを探ったりする反応が見られるようになり、次の段階に移行する。

次の段階は、鏡を避ける反応が見られる時期で、一五か月齢から二四か月齢にかけてピークとなる。この時期には、鏡映像に対してしりごみしたり、泣き出したりする。

その次の段階は二一か月齢から二四か月齢に始まる、いわゆる「自己認知」の時期である。これまでが、他者に対する社会的な反応であったのに対して、この時期にはそのような社会的反応は消えて、恥ずかしそうに鏡を見たり、当惑したような表情を見せたり、おどけた顔をしてみせたり、といったような反応が見られる。また、口紅のつけられた部分をよく見ようとして、手で触れたりする反応も見られるようになる。参考までに、このようなテストをルージユテストという。もちろん口紅を使うからだが、サルやチンパンジーでは、特殊な染料を使うため、マークテストと呼ぶ。

さて、こうした結果は、他の研究者たちの報告とも一致しており、自己鏡映像認知の過程は、幼児の社会的な発達の指標としても使われている。(4)、後に、自分が映っているビデオ画像の認知とも組み合わせられて、こうした研究が進み、発達のなステージがもう少し細かく分けられた。それについては、後述する。

さて、近年では、鏡による自己認知と情動の発達との関係をとらえた研究が報告されている。情動の発達には、一般にふたつの段階があると言われている。まず、怒りや恐れなどの基本的な情動(一次的情動と呼ばれる)が見られ、続いて困惑や恥や罪悪感などといった高次の情動(二次的情動と呼ばれる)が出現する。ルイス (M. Lewis) らは鏡による自己の認知とこの二次的情動が大いに関係があるのではないかと考えたのである。

そこで次のような実験をおこなった。対象となった子どもたちを年齢別に、以下の三つのグループに分けた。九か月齢から一二か月齢のグループ、一五か月齢から一八か月齢のグループ、そして二一か月齢から二四か月齢のグループである。このようなグループを対象に、二つの条件のもとで観察をおこなった。ひとつは、ストレンジャー条件で、知らない女性と対面する。もうひとつは、ミラー条件で、鏡、すなわち、鏡に映った自分と対面する。このミラー条件には、鏡を呈示するだけの条件と子どもたちに気づかれないように鼻のわきに口紅を塗ったのち

に鏡を見せる条件の二種類があった。たとえば、ティシューに口紅をつけ鼻を拭うふりをして口紅をつける。対象となった子どもにはちよつと気の毒であるが。

H このような実験の結果、次のようなことがわかった。知らない人に対しては泣いたり恐ろがりするが、鏡に映った自己像に対してはそのような一次的情動を示したものは少なく、困惑と思われる表情を示したものが多く見られた。また、困惑の表情を示した子どもは年長になるにしたがって多くなった。そして、面白いことに困惑の表情を示した子どもでは、ルージュテストで鏡を見て口紅に気づき指で触れたりする自己指向性反応が有意に多く出現したのである。これはルイスらの「仮説を支持する。つまり、自己鏡映像の認知と困惑などのいわゆる二次的情動は密接に関連して発達するらしいということである。僕たちは、自己を（5）に見ることができたとき、すなわち自己認識ができたときに恥や困惑といったような感情を持つようになるのかもしれない。

鏡は、自分の姿とその同時的な動き（これを「随伴性と呼ぶことにしよう）を直接的に見せてくれる道具である。しかし、よくよく考えてみると、そのような機能を持っているのは、現代の社会ではほかにもある。そう、ビデオである。そして、実際にビデオを使って自己の認知を実験した報告がある。ビデオに、いま現在被験者となっている赤ちゃんの映像と、ちよつと前に記録した同じ赤ちゃんの映像を対にして映し出し、被験者となっている赤ちゃんに見せたのである。そして、九か月の赤ちゃんでも、その二つのタイプの画像を区別できることがわかった。しかしながら、一五か月になるまでは、過去に記録した自分のイメージと他の子どものイメージを弁別できなかつたのである。

さて、この条件を考えてみると、違いはただ一つ。随伴性があるかないか。自分とそれ以外を区別するのに、随伴性が重要な要因であることが指摘されたわけである。

（板倉昭二『自己の起源』より）

問一 傍線 A・B・F のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線 D・G・J の読みをひらがなで書きなさい。

問三 空欄（1）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア ところが イ だから ウ さて エ そして オ たとえば

問四 空欄（2）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア なぜなら イ 確かに ウ しかし エ また オ ただし

問五 傍線C「焦点をあて」(る)と明らかに異なる意味の言葉は次のうちどれか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア 着目する イ 念を押す ウ 目を向ける エ 光をあてる
オ 意識する

問六 空欄(3)に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア あたかも イ さしずめ ウ もちろん エ ひとまず オ もはや

問七 傍線Eに「結果はもうわかりだと思ふ」とあるが、その「結果」はどのようなものか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア 橋の下の犬に骨を奪われてしまった。
イ 何も起こらずそのまま橋を渡るだけだった。

ウ 水面の犬に吠え返されただけだった。

エ 骨を二本手にいれることができた。

オ 自分のくわえていた骨を落としてしまった。

問八 空欄(4)に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア しかし イ なぜなら ウ ただし エ したがって オ ところで

問九 傍線Hに「このような実験の結果、次のようなことがわかった」とあるが、この実験結果についての説明として最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 鏡に映った自分に困惑した子どもほど、自分の顔についての反応が多かった。

イ 年長の子どもほど、知らない人を恐がり、鏡に映った自分に対して困惑することが多かった。

ウ 自分の顔について口紅について反応した子どもほど、知らない人に対して一次的情動を示した。

エ どの子どもも、鏡に映った自分に対しては一次的情動を示すという反応が多かった。
オ 知らない人を恐がる子どもほど、鏡に映った自分に対して一次的情動を示すことが少なかった。

問十 傍線I「仮説」と明らかに異なる意味の言葉は次のうちどれか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア 推測 イ 仮構 ウ 想定 エ 目算 オ 仮定

問十一 空欄（ 5 ）に最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しな
 せよ。

ア 直観的 イ 一義的 ウ 肯定的 エ 客観的 オ 理想的

問十二 傍線K「弁別」（する）と明らかに異なる意味の言葉は次のうちどれか、最も適す
 るものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

ア 鑑別する イ 区別する ウ 見分ける エ 離別する オ 識別する

問十三 傍線Lに「自分とそれ以外を区別するのに、随伴性が重要な要因である」とあるが
 どうか、最も適するものをア～オの中から一つ選び、その記号を記入しなさい。

- ア 自己像と他者の映像とを同時に見れば、自己と他者を区別できるということ。
- イ 成長に伴って変化する自己像があれば、自己と他者を区別できるということ。
- ウ 自分の動きと同時に動く自己像があれば、自己と他者を区別できるということ。
- エ 過去の自己像と他者の映像をくらべれば、自己と他者を区別できるということ。
- オ 自分と同時に成長してきた他者の映像があれば、自己と他者を区別できるというこ
 と。

国語

解答用紙二

〔Ⅱ〕

問十三	問十二	問十一	問十	問九	問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一
											D	A
											G	B
											う	
											J	F

受験番号	
------	--

